#0 Introduction

僕の記憶は一体どれが本物なのだろうか。

#1

三階にある事務所で電話の呼び出し音が鳴り響く。会社にある電話というものは大概どこでも同じで、くすんだクリーム色をしているものである。それを見るたびにボクは何かしらの嫌悪感を抱く。

　仕事というものは元来面白いものではないはず。人は遥か古代から生きるために働いて来た。自分とその家族が生きていくために狩りに出る。時には危険な環境に身をおかなければならない。だから、面白いはずがない。

　必死なのだから。

　それでも、電話は鳴り続ける。

　受話器を取った。

「西洋化学、開発センターです」

「M電器産業の井出やけど、中村部長いらっしゃる？」
先方の口調に自信が満ち溢れていることに悪寒が走る。
「中村ですね。少々お待ち下さい・・・・中村さーん、三番に電話です」
もちろん保留にしてから中村部長を呼んでみた。
「誰からー？　後で電話するって言っといて！」
・・・毎回こんな受け答えが続く。
嫌な気分で吐き気を抑えつつも、引き続き僕はCADに向かう。こうやって、図面を描き、装置を創っては実験を繰り返す。こんな毎日を十年も続けている。
横にある窓からは、当社工場の煙突が見える。琵琶湖からの風により、煙突の煙が微かに揺れる。
そろそろ十六時になる。心はすでにお帰りモードになっているので、やる気は失せている。
そう、最初からやる気なんて持ち合わせていなかったのかも。
十九時。会社を出る。工場の門を出るまでにすれ違う人々の顔は皆、同じに見えた。
ふと思った。サラリーマンというのは、基本的に意気地なしなのかもしれない。自分のやりたい仕事があるにせよ、所詮会社のお金で実行する。失敗しても、金銭的に損をするのは自分ではなく会社である。自信に満ちていても、結局のところ自分の甲斐性で仕事をしている訳で

はない。

自宅のある奈良まで帰るには、京都を経由する。京都駅は人々で溢れかえっている。通勤の通過地点であることが残念である。

古都の風景と近代的な駅ビルがあり、若者から年配の方々まで充分楽しめる街。

遥か昔のこと、僕は一度だけ京都の北山でデートをした。植物園に行き、帰りに鴨川を歩いた。

あのころは、今より生き生きしていた。当時の彼女は、そんな僕を大好きでいてくれた。でも今の僕はこんな有様。でも彼女は、昔と変わらず僕を愛していてくれている。

・・・妻と知り合って七年が経つ。

鴨川のほとりではにかんでいる僕をサヤカは優しい笑顔で見守っていた。オクテだった僕のことを全てお見通しのようだった。

今、浅い眠りの中でK鉄電車に揺られながらサヤカのことばかりを考える。それが会社から帰路につくおきまりであり、ささやかな僕の楽しみである。

奈良に着く頃には時計の針は二十一時を指そうとしていた。流石に人通りは少なくなる時間である。

奈良の街は住み易く、人々にとても穏やかな印象を与える。京都が遥か昔に栄えた近代都市というなら奈良はその一昔前の都市。古き善き香りが流れる。
その中を自転車に飛び乗り、家路へ急いだ。
「早く、帰って夕食を食べよう」
心の中で呟きながら自転車を飛ばす。

「おかえりー」
サヤカは、本当に美しい。どう見ても三十四歳には見えない。
細く真っすぐな髪と長い睫毛。切れ長の目にシャープな顎。笑うと両側に八重歯が覗く。
僕にはこれだけで充分だった。
腹も減ったので早速メシを食べることにした。

続く